7 第二の性 六六

ボーヴォワール著作集：第7巻
第二の性 **

This book is published in Japan by arrangements with Gallimard through Bureau des Copyrights Français.

© *Editions Gallimard*

初版発行日　1966年12月20日
重版発行日　1968年5月31日

訳者　生島遼一
発行者　渡辺睦久
装幀者　真鍋　博
印刷所　小林印刷所
製本所　坂井製本所
定価　740円

株式会社　**人文書院**
都市下京区仏光寺高倉　TEL (351) 3343・3391

7 第二の性兴兴

第二の性 ※※

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

第一章　生物学的条件……154
第二章　精神分析の立場……186
第三章　唯物史観の立場……201
第二部　女の歴史……210
第三部　文学に現われた女
第一章……310
第二章……377
第三章……442
用語解説……453
解説……459

第三部　自由な女

第一章　ナルシシスムの女

ナルシシスムはすべての女性の根本的な態度であるというふうによくいわれてきた。*しかしこの概念をむやみに拡大することは、結局それをこわしてしまうことになる。ちょうど、ラ・ロシュフーコー[一]がエゴイスムの概念をこわしてしまったように。事実、ナルシシスムはきわめて明瞭な自己疎外の一つである。つまり、自己が絶対目標として設定され、主体がそのなかに逃避してしまう。女にはこれ以外にもいろんな態度が――真正のものも虚偽のものも――見出される。そのうちいくつかはすでに考察ずみだ。実際に、女性は自己をふりかえり自己に愛をささげることが、環境上、男性よりも多いのだ。

＊　ヘレン・ドゥーチュ『女性心理』参照。

あらゆる愛は主体と客体の二元性を要求する。女は結局一つに合する二つの道をとおってナルシシスムにみちびかれる、主体として、彼女は不満を経験する。小さい娘のころ、彼女は男の子のペニスに相当する第二の自我をあたえられない。その後も彼女の攻勢的な性欲はみたされずにおわった。なおもっと重要なことは、男のするような活動は彼女に禁じられている。彼女はあくせく働いても、何一つ為さない。妻・母・主婦の職能をとおして、その個別性において認められることがない。男性の真理は、彼が建築する家や、彼が開拓する森林や、彼が治療する病人のうちにある。女は計画や目的を通じて自己を完遂することができないから、自己の人格の内在性のうちにおいて、自己を把握しようとつとめるのだ。シエイエス[二]の言葉をもじって、マリー・バシュキルツェフは書いている。《わたしは何か？　何者でもない、わたしは何になろうと望んでいるのか？　あらゆるものに[三]》。多くの女が自分の関心を自分の自我だけに局限し、それを全体と混同するほどまでに誇張するのはこういうわけ

からだ。《私は自分の女主人公である》ともマリー・バシュキルツェフはいっている。男は行動しなくちゃならないから、自己と対立する。女は無力で孤立しているため、自分を位置づけることも自分の尺度をはかることもできない。なんら重要な目的に到達することができないから、彼女は自分に最高の価値をあたえる。

女がこのように自分の欲望に自らをさしのべることができるというのも、彼女が幼い頃から自分自身の目に客体として映ってきたからである。教育は彼女が自己を完全に疎外することをすすめ、思春期は彼女の肉体を彼女の目に受動的な・欲望の対象としておしえた。それは彼女が繻子やビロードに感激するように、わが手をさしのべて、恋人のような目差しで眺めることができるものだ。自慰の快楽にふけりつつ、女が男性的主体と女性的客体に二分される場合もおきてくる。だから、ダルビエス*が症状を研究したイレーヌは、こんなふうにいっている。《私は私を愛したい》とか或いはもっと情熱的に《私は私をものにする》とか、またはげしい発作のときには、《私は自分に子供をつくらせる》とか。マリー・バシュキルツェフがつぎのように書くとき、彼女もまた主体でも同時に客体でもある。《でもだれも私の腕やからだを見てくれる人がないのは残念だ。こんなにはつらつとして、若さにはちきれそうなのに》。

* 『精神分析』。子供のころ、イレーヌは男の子のように小便をするのが好きだった。彼女はよく水の精になった夢を見た。これはナルシシスムとそれから彼が《拝水症》と名付けている一種の排尿色情症とのあいだの関連についてのハヴェロック・エリスの説を裏書きするものである。

本当は、自己にたいして、積極的に他者となり、しかも意識の光のもとにおいて客体として自己をとらえるということは不可能なことである。分身とはたんに夢想にすぎない。子供の場合、この夢を具体化するものは人形である。女の子は人形のうちに、自分自身の肉体のなかによりももっと具体的に自己を認める。なぜなら、この両者のあいだには分離があるからである。自分と自分とのあいだにやさしい会話をとりかわすために二つのものになりたいという望み、それをノワイユ夫人はとくに、『我が生涯の書』のなかで表現している。

わたしはお人形を愛した。いのちのないお人形に、自分のいのちをわけ与えてやった。お人形もいっしょに毛布と羽ぶとんとで包まなければ、暖かい夜具にくるまって眠る気がしなかった……わたしは二つに分れ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

た純粋の孤独をしんから味わいたかったのだ……いつまでも純粋に、倍も自分自身でありたいというこの望み、それを幼い頃猛烈に感じていたのだった……ああ！　わたしのたのしい空想、不当な涙にもてあそばれる悲劇的な瞬間には、わたしのそばにもうひとりの小さなアンナがいて、わたしの首に両腕をまわして、なぐさめ、理解してくれたらと、わたしはどんなに願ったことだろう……一生通じて、わたしはわたしの心のなかで彼女に出会い、彼女をだきしめた。彼女は、わたしが望んでいたような、慰めのかたちではなく、勇気づけるかたちでわたしを助けてくれた。

思春期に入った娘は、人形の添寝をよしてしまう。ところが、一生通じて女性は、自己から分離しまた合体するために努力するのに、鏡の魔法から非常な助けをうける。オットー・ランクは、神話や夢のなかにあらわれた鏡と分身との関係を明かにした。鏡にうつった反映が自我と同一化されるのは、とくに女性の場合である。男性美は超越性のしるしであり、女性美は内在にともなう受動性をもつ。女性美のみが、視線をとめるようにできており、そしてそのゆえに、鏡面の不動の落しわなにかかることができるのだ。自己を能動性、主体性であると感じ、またそう欲する男性は、自分の凝結した映像のうちなんかに自らを認めない。その映像は彼に大して魅力をもたない。男性の肉体は彼に欲望の対象として映じないからだ。それにひきかえ、女性は自己を客体であると知り、またすすんでそうなるから、鏡のなかに本当に自己を見るような気になる。受動的な鏡の反映は、彼女自身のようにひとつの物体である。こうして彼女は、女性の肉体すなわち彼女の肉体を渇望するとおなじように、鏡に見る生命のない特質を自己の讃美と欲望とで生気づける。こういう事実をよく理解しているノワイユ夫人は打明ける。

わたしは、自分の内にある疑うべくもない強大な知的才能よりも、しょっちゅうみる鏡に映った姿のほうに虚栄心を感じるのだった……肉体的快楽のみが魂を完全に満足させてくれる。

《肉体的快楽》という言葉は、ここでは漠然として不的確だ。魂を満足させるということは、知性はまだ証明されていないが、眺められた顔は、現在、その場にはっきりと与えられているということだ。枠のなかの一宇宙をかたちづくった光の面のうちに全未来が集約されてい

る。このせまい限界の外では、事物は無秩序な混沌でしかない。世界は、「唯一者」という映像の輝いたこのガラスの一片に還元される。その反映のうちに溺れる女はすべて、空間と時間とをただ一人絶対者的に君臨する。彼女は、男性に、財産に、名誉に、愛欲にたいし、一切の権利をもつ。マリー・バシュキルツェフは、自分の美に酔いしれるあまり、それを不滅の大理石のうちに刻みつけたいとねがった。こうして、彼女は彼女自身を不滅にしようとしたのであった。

家に帰ると、わたしは服をぬぎまる裸になり、まるではじめて見るように、自分の肉体の美しさに眼を見はる。わたしの影像を作らせねばならない。でもどうやって？　結婚しないことには、まず不可能だ。しかし、どうあっても作らせねばならない。わたしはいずれ次第にみにくくなり、だいなしになってゆくのだ……夫をもとう。わたしの影像を作らす目的のためだけにでも。

セシル・ソレル[四]は、あいびきに行く準備をする自分の姿をつぎのように描く。

わたしは自分の鏡のまえにいる。わたしはもっと美しくなりたい。わたしは獅子のたてがみと取っ組む。くしの下から火花が散る。黄金の光線のように突立った髪の毛のまんなかで、わたしの顔はまるでお日様のようだ。

私はまた、あの朝、カフェの手洗所で見た一人の若い女を思い出す。手にばらの花を一輪もって、少し酒がまわっているようすだった。彼女は、まるで自分の映像を飲みこもうとするかのように唇を鏡に近づけて、ほほえみながらつぶやくのだった。《まあ、きれい、わたしはほんとにきれいだわ》。巫子（みこ）と偶像とを一身に兼ねたナルシシストは、光栄の後光につつまれて永遠のさなかを飛翔する。そして、雲のあなたにひざまずいた人間が、彼女を崇める。彼女は自らを眺めている「神」である。《わたしはわたしを愛する。わたしはわたしの神だ！》とメジェロフスキー夫人はいった。神になること、それは、即自と対自との不可能な統合を実現することである。ある人間がこのことに成功したと想像する瞬間は、彼にとって、喜悦と昂揚と充実との恵まれた瞬間だ。十九歳のとき、ルーセルはある日屋根裏部屋で、自分の頭上を栄光の後光がとりまくのを感じ、一生それから脱けられ

なかった。彼女自身の姿をした――彼女の考えでは、彼女自身の意識によって生命を与えられた――美と欲望と愛と幸福の姿を鏡の底に見た若い娘は、一生を通じて、このすばらしい天啓の約束するものを追求しようとする。《おまえこそ、わたしの愛しているものだ》とある日、マリー・バシュキルツェフは自分の鏡にうつる影に向って打明ける。また別の日には彼女はこうも書いている。《わたしはわたしをとても愛している。わたしはあまりうれしくて、夕食のあいだ気ちがいのようだった》。絶世の美人でない場合でも、女性は自分の魂の独特の美しさが顔ににじみ出ているように思う。そしてそれだけで彼女の陶酔にはもう十分だ。ヴァレリという女性の姿の下に、自分を描いた小説の中で、クリュドネル夫人は自分をつぎのように描写している。

彼女には、わたしがまだどのような女にも見たことのない、一種独特のところがある。彼女に匹敵するやさしさ、彼女以上の美しさを具えている女はいても、彼女にはるか及ばない。美人とはいえないだろうが、人をひきつけずにはおかない精神的で魅力的ななにものかをもっている。彼女を見た人は、彼女があんまりきゃしゃですんなりしているので、まるで三色すみれのようだと思うだろう……。

容色にめぐまれない女たちですら、ときには鏡の恍惚を知ることができるという事実に驚くのは間違っている。彼女たちば、いま現に肉体としてそこに存在しているという事実だけで感動してしまう。男性と同じように、彼女たちを驚かせるには、若い女の肉体という純粋なゆたかさだけで十分だ。そして彼女たちは、いくぶん虚偽的に、自己を個別主体のように考えているから、元来は種としての特質であるものに個性的な魅力を付加する。顔や肉体のうち、彼女たちはなにか優雅な、珍らしい、際立った特色を発見することになろう。自分を女性であると感じるただそれだけで、彼女は自分を美しいと信じるのだ。

ところで、鏡はいちばんいい道具だけれど、これが分身の唯一の器具ではない。心の内で自分とする対話のなかで、だれでも自分の双生児をつくることを試みることができる。一日の大部分をひとりで過ごし、家庭の務めに退屈している女性は、自分の姿を夢に仕上げる暇をもっている。若い娘のころは、彼女は未来を夢みていた。無限の現在の中にとじこめられた今、彼女は自分に自分のお話をしてきかせる。そして、そのなかに一個の美的

秩序を導き入れるように潤色し、死に出会うまえから、彼女の偶然的な生活を一個の宿命に変えてしまう。

女性が幼年期の思い出にどんなに執着するかは、とくによく知られている。女流文学がそれを立証する。男が書く自伝では、幼年期は一般的に第二義的な位置しかしめないが、女性は、反対に、幼時の物語でとどめる場合が多い。幼時は彼女たちの小説や物語の優先的な材料である。友人や愛人に自分のことを話す女性は、その話のほとんどをつぎの言葉で始める、《わたしは小さい頃……》。彼女たちはこの時期に郷愁を抱いている。それというのが、その頃は、彼女たちは頭上に父親の慈愛と威厳とにみちた手を感じ、同時に独立の喜びを満喫していた。おとなたちから保護され支持され、彼女たちは自主的個人であって、そのまえには自由な未来が開かれていた。ところが、いまでは、彼女は結婚や恋愛によって不十分に護られ、現在の中にとじこめられた女中か客体になってしまっている。彼女たちは世界に君臨し、日に日に、それを征服しつつあった。ところがいまや彼女たちは宇宙からひきはなされ、内在と反復とにささげられている。彼女たちは自分が失権したことを感じる。しかしもっとも彼女たちが悩むこと、それは一般性の中に呑みこまれてしまうということ、つまり人妻や母親や家政婦など無数の平凡な女性の中のひとりになってしまうということだ。子供の頃は、こうではなくて、めいめいは自分の立場を独自のやりかたで生きてきた。彼女は、自分の人生修業と友達のそれとのあいだに類似のあることを知らなかった。両親や先生や友人から、彼女はその個別性を認められていた。彼女は自分がほかの誰にも比べられない独特の人間で、独特の機会を約束されているものと思っていた。彼女はまだ若い妹の姿を感動をもってふりかえる。あの若いころの自由と我儘と主権を彼女は放棄し、また幾分裏切ってしまったのだ。女となった彼女は、かつての人間だった彼女をなつかしむ。彼女は自己の底に死児を見つけようとする。《少女》、この言葉は彼女を感動させる。が、それにもまして、《奇妙な子》という言葉は彼女を感動させる。こういう言い方は失われた独創性をまざまざと復活させるからだ。

彼女はこの非常に貴重な幼年期を前にして遠くからうっとりしているだけではおさまらない。それを彼女の内部に再生しようとする。彼女の趣味や思想や感情が異常な新鮮さを保っているように自分に思いこまそうとする。途方にくれた様子で虚空をみつめ、首かざりをいじりつつ、または指輪をまわしつつ、彼女はつぶやく。《変ってるのよ、わたし、わたしったらいつもこうなの……ね

え、妙じゃない、わたし、水を見るとぼーっとなっちゃうのよ……ああ！　わたし田舎が大好き》。何か一つ好みを意見をもっていることはみな世界への挑戦のように思える。ドロシー・パーカーは、このひろく行き渡った特徴を生きいきと描いている。彼女は、ウェルトン夫人をつぎのように描写する。

彼女は盛りの花にとりまかれていなければ幸福になれない女のように自分を考えるのが好きだった……彼女は告白熱にかられて、自分がどれほど花を愛しているかを人に告げるのだった。そのささやかな告白には、弁解に近い調子があった。それはまるで聞き手に対して、彼女の趣味をあまりに異常だと判断しないようにと頼むかのようだった。彼女の相手がびっくり仰天して、《まさかそんな！　なんてことをおっしゃるんです！》と叫びだすのを彼女は待っているかのようだった。ときどき、彼女はそのほかに小さな偏愛を告白するのだった。まるで自分の心をさらけ出すことは繊細な神経が許さないといったように、いつもすこし途方にくれたような様子で、自分がどんなに色彩や、田舎や、遊びや、ほんとに素敵な曲や、美しい生地や、仕立のいい服や、太陽などを愛しているかを語るのだった。しかし、彼女がいちばんたびたび告白したのは、花にたいする愛情であった。この趣味は、他のどんな趣味にもまして、彼女を普通人から区別するものと彼女は思いこんでいた。

女性は、このような分析を、すすんで行動によって確証しようとする。彼女はある色彩を選び、《あたしは、緑、これが私の色よ》という。彼女は好きな花や、香水や、音楽家や、迷信や、癖をもち、そういうものを大切にする。自分の個性を化粧や心の中で表現するためには、彼女は美しくある必要はない。彼女がつくり上げる人物は、彼女の知性と執着と疎外の深さに応じた一貫性と独創性をもっている。ある女性は、まったく行きあたりばったりにいくつかのばらばらの特徴を混ぜ合わす。また別な女性は系統的にある形態をつくり、その役割を忠実に演じる。この遊びと現実とを女性が区別しかねることはすでに述べた。その女主人公（ヒロイン）を中心に、人生が悲痛なもしくはすばらしい、つねに少々奇妙な小説に構成される。ときどき、すでに書かれた小説が用いられることがある。私は何人の若い娘から『埃り』のジュディに自分の姿を見出すとうちあけられたかわからない。ある非常にみにくい老婦人のことを思いだす。彼女は、口ぐせの

ように《『谷間の百合』を読んでください。あれはわたしの身の上話です》といっていた。まだ子供の私は、このしおれた百合を、敬意のこもった驚きで眺めたものだ。ほかの女たちは、もっと漠然とつぶやく。《わたしの一生は、ほんとうの小説みたい》。彼女たちの額の上に幸運の或いは不運の星がくっついているのだ。《こんなことはわたしにだけしか起こらないんだ》と彼女たちはいう。悪運が彼女らの後をつけるか、幸運が彼女らにほほえむか、いずれにしても彼女たちはそれぞれ宿命をになっているというわけだ。セシル・ソレルは、その『思い出』全篇を通じての例の純真な調子で書いている。《こうしてわたしは社交界にデビューしました。わたしの最初の友は天才と美貌という名前でした》。また、ナルシスムの並はずれた記念碑である『わが生涯の書』の中で、ノワイユ夫人は書いている。

女の家庭教師たちがある日姿を消してしまい、代って宿命がやってきた。宿命は、強い一面か弱い女性を以前甘やかしたに劣らず虐待し、彼女を波間にもてあそび、彼女はまるで花束を救い上げようとしてもがきつつ声をかぎりに歌う、オフェリヤのように見えた。止めを刺してくれと彼女のほうから願うのを宿命は望んでいた。ギリシア人は死を利用したではないか。

ナルシスム的な文学の例として、さらにつぎの一節を引用しなければならない。

わたしはもとは小さいが丸々した手足と血色のよい頬をもった丈夫な少女だったが、弱々しく病みがちな体質になり、感傷的な年頃の娘になってしまった。わたしの沙漠のあいだから、飢餓のあいだから、またつかの間の神秘的な死のあいだから、さながらモーゼの岩から発するかのようにややもすればふしぎな生命の泉がほとばしり出そうになるのだったが。わたしは当然のことだとしても、自分の勇気を自慢しようとは思わない。わたしはそれを、自分の体力や幸運と同じものと見なしている。ひとが、自分は青い眼をしているとか、黒い髪をしているとか、小さな丈夫な手をしているとか言うのと同じふうにいうことができるのだ。

そしてまた、つぎの数行。

今日になってわたしはさとることができた。魂とその諧調の力とに支持されて、わたしは自分の声に合わ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook